

平成21年 4月30日現在

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2007～2008

課題番号：19520391

研究課題名（和文） 近世漢文訓読語法の日本語史的研究

研究課題名（英文） A Historical Study of the *Kanbun-Kundoku*
during the *Edo* Period

研究代表者

齋藤 文俊 (SAITO FUMITOSHI)

名古屋大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：90205675

研究成果の概要：日本において長い伝統を有し、また、欧文直訳体や翻訳語法にも大きな影響を与えている漢文訓読語法に焦点をあてることにより、江戸・明治期における翻訳語法の変遷と、現代日本語の形成過程を解明していくことがこの研究の目的であり、この2年間の研究において、江戸・明治期において刊行された漢文訓読資料・白話小説資料・蘭学資料・英学資料・明治期翻訳小説を調査し、その語法の変遷を漢文訓読語法を中心に整理することにより、明治期の語法・文体に与えた影響を解明した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	500,000	150,000	650,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
総計	1,000,000	300,000	1,300,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：漢文訓読・日本語史・翻訳語法
近代語・近世

1. 研究開始当初の背景

近世（江戸時代）の漢文訓読法は古来の訓読語法を受け継ぎながら、史的に大きく変遷し、また儒学の系統によっても様々な特徴を有している。さらに漢文訓読語法の影響は近世だけでなく近代（明治期）の文章にも引き継がれており、『佳人之奇遇』など政治小説や、『聖書』の翻訳、『花柳春話』・『八十日間世界一周』など明治初期翻訳小説をはじめとする近代漢文訓読体の資料にそれがみられる。

一方、近世の蘭学者、及びその伝統を受け継いだ明治初期の洋学（英学）者は、オラン

ダ語・英語等を学習する際に漢文訓読の手法を利用している。そのため、蘭学資料・英学資料にも漢文訓読語法をそのまま取り入れた語法が多くみられ、それらが翻訳語法及び欧文直訳体に特徴的な語法として、現代語の語法に大きな影響を与えている。

また、近世白話資料（中国白話小説の翻訳本）にみられる語法も、漢文訓読語法に影響を受けつつ成立・発展し、江戸・明治期の語法に影響を与えている。

以上のことから、近代日本における聖書の語彙・語法・文体、さらには、近世から近代における日本語の変遷および近代日本語の

形成過程を解明していく上では、漢訳聖書の影響によって入り込んだ漢文訓読語法に焦点をあてて調査整理していくことが有効な方法であると思われる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、漢文訓読語法が含まれる下記の資料群を収集整理し、その中に含まれる漢文訓読語法を調査していく。

- I 近世漢文訓読資料
- II 近世白話小説資料
- III 蘭学資料
- IV 英学資料
- V 近代漢文訓読体資料

さらに、漢文訓読語法のデータベースを作成し、それぞれの資料の中に、どのような語法が含まれているのかを確認しながら、近世における漢文訓読語法の使用状況の全体像を解明していくことを目指す。

本研究により、漢文訓読という日本独特の翻訳法が、中国白話小説・オランダ語・英語など、中国や西洋の文化を受容する際にどのような役割を果たしたかを明らかにすることができ、日本語の歴史の解明だけにとどまらず、「日本翻訳史の研究」という、より大きな研究課題へとつなげていくことができる。

また、本研究では、漢文訓読語法を調査するにあたって、その基礎となる漢文訓読資料をコンピュータ入力し、漢文訓読語法のデータベースを作成していくことも計画している。上述したように、これまで漢文訓読資料は、多種の漢字字体と、返点・振り仮名・送り仮名などの情報が煩雑なため、コンピュータ処理が難しく、語学研究には必須な検索機能などを利用しにくい状況にあった。近年Unicodeの導入、『今昔文字鏡』をはじめとするソフトウェアの開発により、多種の漢字字体を処理することが可能になり、また、TeX・ワープロのマクロとして、返点・振り仮名・送り仮名などを処理する手法も開発されつつある。それらを比較検討し本研究の処理に利用していくことにより、漢文訓読資料をテキストデータベースとして利用していくことも可能にし、漢文訓読語法研究に役立てていく。

近世における漢文訓読語法の研究は、江戸から明治にかけての文章語の全体像を研究していく上で不可欠なものであり、日本語史研究および近代日本文学研究に貢献することができる。また漢文訓読を翻訳論の立場から国際的に考察していくきっかけともなる。さらに、近世の漢文訓読を研究することにより、日本近世思想史、さらには日本近世教育制度史の研究面でも寄与できるものと考えられる。

3. 研究の方法

(1) 先行研究、またこれまでの調査（研究業績欄論文など）をもとに、下記の5資料それぞれについて、これまで蓄積してきた研究成果を整理する。

- I 近世漢文訓読資料
- II 近世白話小説資料
- III 蘭学資料
- IV 英学資料
- V 近代漢文訓読体資料

(2) 上記5資料に関して、それぞれ必要な、近世漢文訓読図書、近代漢文訓読体関係図書、近世白話小説・蘭学・英学資料関係図書を購入する。

(3) また、国内の図書館を訪ね、そこに所蔵されている近世漢文訓読資料、近代漢文訓読体資料、近世白話小説・蘭学・英学関係資料などを調査し、複写可能な場合は複写を依頼する。

(4) 上記により、収集・調査した資料を整理するとともに、漢文訓読語法データベース作成の基礎作業（漢字字体・返点・振り仮名・送り仮名などの情報に対する処理方法の検討）を行う。

(5) 上記により収集・整理した資料に基づき、漢文訓読語法データベース作成作業を本格的に行う。

- ① OCRソフトで機械的に読みとり可能なものはそれを使用してコンピュータ入力し、テキストデータベースとして利用する。
- ② 漢文訓読資料、漢文訓読体資料については、まず返点・振り仮名・送り仮名などの情報を、前年度検討した結果に基づき処理した上で手作業で必要な語法をコンピュータ入力する。

(6) 上記データベース作成段階で、確認を必要とするものは再調査を行い、複写可能なものは依頼する。また、補充すべき資料はそれを購入する。

(7) 本研究のまとめをするとともに、1で作成したデータベースを冊子および電子形態で公開・配布する。

なお、上記(1)～(3)の作業を1年目の平成19年度に、(4)以降の作業を、2年目の平成20年度に行った。

4. 研究成果

本研究は、江戸・明治期において刊行された漢文訓読資料・白話小説資料・蘭学資料・英学資料・明治期翻訳小説を調査し、その語法の変遷を漢文訓読語法を中心に整理することにより、明治期の語法・文体に与えた影響を解明していくことが目的であるが、本研究の成果の一つとして、近代日本において翻訳された聖書に用いられた「漢文訓読語法」を調査することを通じて、聖書の語彙・語法・文体の特徴が解明されるとともに、近代日本語の形成過程も明らかになってきた。

(1)日本における「聖書」の本格的な翻訳は、幕末期に始まるが、その際参考にされたのが、中国ですでに翻訳されていた「漢訳聖書」である。日本には古来漢文訓読という便利な翻訳システムがあり、しかも漢文訓読体の聖書には文体的な威厳もある。しかしその一方で、聖書翻訳に関わったヘボン・ブラウンなどの外国人宣教師を中心に、聖書はもっと平易な文章にするべきだという意見も出ていた。このようにして翻訳された翻訳委員社中訳『新約全書』は、漢文訓読体を基本にしなから、和文の要素も兼ね備えたものとなっている。そして、その訳語・語法・文体は、現代の聖書にも大きく影響を与えているだけでなく、近代日本語の形成にも大きな影響を与えたのである。

(2)以上のような関係を明らかにするため、下記の4資料を調査し、その対照表を作成した。

- ①ブリッジマン・カルバートソン訳『漢訳聖書』(漢訳聖書の訓点本)
- ②ヘボン・ブラウン訳『新約聖書約翰伝』
- ③翻訳委員社中訳『新約聖書約翰伝』
- ④翻訳委員社中訳『新約全書』

以下、その対照表の一部を示す。
(ヨハネ伝第1章20節まで)

ヨハネ伝一覽

(訓→訓点本、へ→ヘボン訳、分→分冊、全→全書とする)

第1章

- 訓 1.1 元始道有(リ) 道神ト偕ニス 道ハ則(チ)神ナリ
へ 1.1、元始に言靈あり、言靈は神とともにあり、言靈は神なり。
分 1.1、太初にことばあり。ことばは神とともにあり、道はすなはち神なり。
全 1.1、太初に道あり。道は神と偕にあり、

ことば すなは
道は即ち神なり。

- 訓 1.2 是ノ道 元始神ト偕ニセリ
へ 1.2、この言靈ははじめに神とともにあり、
分 1.2、この道ははじめに神とともにありき。
全 1.2、この道は太初に神と偕に在き。

- 訓 1.3 万物道為造ラ所 凡ソ受造ノ者之ニ由テ[而]造ラレナル無(シ)[焉]
へ 1.3、よろづのものこれにてなれり。なりしものはこれにあらでひとつとしてなりしものはなし。
分 1.3、万物これによりてつくらる。つくられたるものに一としてこれによらでつくられしはなし。
全 1.3、万物これに由て造らる。造れたる者に一として之に由らで造られしは無。

- 訓 1.4 道ニ在テ生有(リ) 生ハ[也者] 乃チ人之光
へ 1.4、これに生ありし。いのちは人のひかりなりし。
分 1.4、これに生あり。このいのちは人のひかりなり。
全 1.4、之に生あり。此生は人の光なり。

- 訓 1.5 光ハ[於]暗ニ照テ[而]暗ハ之ヲ諳ラ弗
○
へ 1.5、光は暗にてりて、暗はこれをさとらざりし。
分 1.5、光はくらきにたり、暗はこれをさとらざりき○
全 1.5、光は暗に照り、暗は之を暁らざりき○

- 訓 1.6 神遣ス所之人 約翰ト名ルモノ有(リ)
へ 1.6、さて、神のつかはれしヨハネといふものあり。
分 1.6、さて、こゝに神のつかはしたまへるヨハネといへるものあり。
全 1.6、偕、こゝに神の遣し給へるヨハネと云る者あり。

- 訓 1.7 彼来テ証ヲ作ス 即チ光ノ為ニ証ヲ

作シ 衆ヲシテ之ニ因テ[而]信ス可
ラ俾ム
へ 1.7、かれは証のためひかりにつきてあかしをたて、みなかれによりて信ずるためにきたれり。
分 1.7、そのきたりしは証のためなり。すなはち光につきてあかしをなし、すべての人をしておのれによりて信ぜしめんがためなり。
全 1.7、その来りしは証の爲なり。即ち光に就て証を作、すべての人をして己に因て信ぜしめんが爲なり。

訓 1.8 彼此光ニ非ス 惟光ノ為ニ証ヲ作ス耳
へ 1.8、かれはそのひかりにあらざれども、ひかりについて証をたつるためにきたりし。
分 1.8、かれはひかりにあらざ、光について証をなさんためにきたれり。
全 1.8、彼は光に非ず、光に就て証を作ん爲に來れり。

訓 1.9 斯レ乃チ世ニ臨ム之真光 万人ヲ照ス者也
へ 1.9、それ、世界にきたりてもろもろの人をてらすものは、まことのひかりなり。
分 1.9、それ、すべての人をしてらすまことのひかりは世にきたれり。
全 1.9、夫、すべての人を照す真の光は世に來れり。

訓 1.10 彼嘗テ世ニ在(リ) 世其造ル所為リ而シテ世之ヲ識ラ不
へ 1.10、かれ世界にありて、世界もかれにつくられしに、世界の人これをしらず。
分 1.10、かれ世にあり。よはかれにつくられたるに、世これをしらず。
全 1.10、かれ世にあり、世は彼に造れたるに、世これを識ず。

訓 1.11 彼 己ニスル者ニ至ル 而シテ己ニ属スル者之ヲ受ケ不
へ 1.11、かれ、おのれの国にきたりしに、国の民これをうけいれず。
分 1.11、かれ、おのれの国にきたりしに、そ

の民これをうけざりき。
全 1.11、かれ、己の国に來しに、其民これを接ざりき。

訓 1.12 凡ソ之ヲ受ル者 即チ凡ソ其名ヲ信スル者 彼之ニ權ヲ賜テ神之子ト為ス
へ 1.12、かれをうけ、その名を信ぜしものは、神の子となる權をたまへり。
分 1.12、かれを接、その名をしんぜしものには、權をたまひてこれを神の子となせり。
全 1.12、彼を接、その名を信ぜし者には、權を賜ひて此を神の子と爲り。

訓 1.13 此衆血氣ニ由ルニ非ス 情欲ニ由ルニ非ス 人意ニ由ルニ非(ズ)シテ[而]生ル 乃チ神ニ由ル也
へ 1.13、これは血脈にもよらず、性質にもよらず、人のこゝろにもよらず、たゞ神によりてうまれなり。
分 1.13、かゝる人は血脈によるにあらざ、情慾によるにあらざ。ひとの意によるにあらざ。たゞ神によりてうまれしなり。
全 1.13、斯る人は血脈に由に非ず、情慾に由に非ず、人の意に由に非ず、唯神に由て生れし也。

訓 1.14 夫レ道肉身ト成テ我儕之間ニ居リ我儕其榮ヲ見ル 猶ホ天父独生之子之榮ノ(ゴト)シ 恩寵ヲ以テ真理ヲ以テ充滿ス[矣]○
へ 1.14、それ言霊人になりて恵とまことゝをみてゝわれらのうちにやどり、われらその榮きを見るに、父のひとりうみたまひしものゝ榮きがごとし。
分 1.14、それことば肉体となりてわれらのうちにやどれり。われらその榮きを見るに、まことに父のうみたまへる独子のさかえにして恩寵と真理にてみり○
全 1.14、それ道肉体と成て我儕の間に寄り。我儕その榮きを見るに、実に父のうみたまへる独子の榮にして恩寵と

まこと みて
真理にて充り○

訓 1.15 ヨハネ 之カ為ニ証ヲ作シ呼テ曰
我我ニ後レテ来リ 而シテ我ニ先
テ在リ 其本[於]我ニ先ツ
者ナルヲ以(テ)ナリト言ルハ 即チ
斯人ナリ[也]

へ 1.15、ヨハンネこれにつき証^{あかし}をたて、
よびいひけるは「われののちにき
たらんものは、われにまさる。そは、
われにさきだつものなり」といひし
はこの人^{ひと}なり」

分 1.15、ヨハネこれが証^{あかし}をなして、よびい
ひけるは「われさきにわれにおく
れきたらんものは我よりまされる
ものなり。そは我よりさき^わにありし
ものなればなり」といひしはこの人^{ひと}
なり」

全 1.15、ヨハネ之が証^{あかし}を作^{なし}て、呼^{よび}いひける
は「我^{われ}さきに我^{われ}に後^{おく}れ来^{きた}らん者は
我^{われ}より優^{まさ}れる者なり。蓋^{そは}我^{われ}より先^{さき}
に在^{あり}し者なれば也」と言^{いひ}しは此人^{このひと}
なり」

訓 1.16 且ツ其充滿ニ由テ[而]我儕皆恩寵ヲ
受ケ恩寵ヲ加フ[焉]

へ 1.16、そのみちたるよりわれらみなうけて、
めぐみに恩寵をくはえたまへり。

分 1.16、われら皆かれにみちたるその中より
うけて、めぐみに恩寵をくはへらる。

全 1.16、我儕みな彼に充滿たる其中より受て、
めぐみに恩寵をくはへらる。

訓 1.17 蓋シ律法ハ摩西自(リ)授カリ 恩寵
ト真理与ハ則(チ)耶蘇基督由ス

へ 1.17、律法はモーセよりさづけられ、めぐ
みとまことはイエスキリストよりあら
はせり。

分 1.17、律法はモーゼによりてつたはり、め
ぐみとまことはイエスキリストにより
てきたれり。

全 1.17、律法はモーセに由て伝^{つたは}り、恩寵と
真理はイエスキリストに由て来^{きた}れ
り。

訓 1.18 從ヨリ未タ人神ヲ見ルアラ(ズ) 惟
独生之子父ノ懷ニ在ル者曾テ之ヲ彰
明ス○

へ 1.18、いまだ神^{かみ}をみし人^{ひと}あらず、たゞ父^{ちち}の
ふところにあるひとりうまれし子は
これをあらはせり。

分 1.18、いまだ神^{かみ}をみしひとあらず。たゞう
みたまへるひとり子^こすなはち父^{ちち}のふ
ところにあるもののみこれをあらは
せり○

全 1.18、未だ神^{かみ}を見し人^{ひと}あらず。惟^{ただ}うみ給^{たま}
へる独子^{ひとりこ}すなはち父^{ちち}の懷^{ふところ}に在^{あるもの}者^{もの}のみ
之を彰^{あは}せり○

訓 1.19 ヨハネ之証左ノ如シ 当時猶太ノ人
エルサレム自(リ)祭司ト利未ノ人と
遣シテヨハネニ問テ曰 爾ハ誰為ル

へ 1.19、ユダヤの人、ヨハンネに「汝^{たづね}はた
れぞや」と尋^{たづね}んとてエロソルマよ
りまつりつかさとレウイの人をつ
かはせしときに、

分 1.19、ユダヤびと、祭司とレビの人をエル
サレムよりヨハネのもとにつかは
し「なんぢは誰ぞ」とはしめける
とき、あかしせること左のごとし

全 1.19、ユダヤ人、祭司とレビの人をエルサ
レムよりヨハネの所に遣し「爾は
誰ぞ」と問しめけるととき、あかし
せること左の如し

訓 1.20 ヨハネ承テ[而]諱マ不 其承テ曰 我
ハ基督ニ非ス

へ 1.20、ヨハンネありて「われはキリストに
あらず」とあからさまにいへり。

分 1.20、彼かくすところなくいひあらはして
「我はキリストにあらず」とあきら
かにいへり。

全 1.20、かれ諱^{かく}す所なく言^{いひ}頭^あして「我はキ
リストに非ず」と明^あかに曰^{いへ}り。

この対照表は、ヨハネ伝全巻において作成済
みであり、冊子および電子媒体での公表を行
う予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[図書] (計1件)

① 齋藤文俊・中村春作他、勉誠出版、「訓読」論 東アジア漢文世界と日本語、2008年、151-170頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

齋藤 文俊 (SAITO FUMITOSHI)

名古屋大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：90205675